



産業と文化を繋ぐ技術

国立大学法人名古屋工業大学
学長 鵜飼 裕之

仕事などで地方を訪れたり、国際会議などで海外に出かけたときに、時間を見つけては、名所・旧跡、古い町並み、博物館などを散策するのを楽しみにしています。そこには、遺されたモノから往時の人々の生活の営みや文化を知って、歴史の流れを学ぶ楽しみがあります。産業という言葉を広く経済活動として捉えれば、人々が生活するうえで必要としたモノの多くが産業の痕跡です。そして、それらが次々と新たな文化を生み出し、さらに新たな産業へと繋がっていくと考えると、歴史探訪とは産業と文化の循環を辿る旅と言えるかも知れません。

さて、その産業の発展を支えてきたのは技術であり、産業と文化を繋ぐ役割を果たしてきました。「技術の本質が人間の本性に立脚した発明であり、創造であり、それはまた文化の本質である」。名古屋工業大学初代学長である清水勤二先生が、「技術のもつ尊い本質と高い文化的価値」を明らかにして「技術者を鼓舞する」という目的で著された論説の中で述べられた言葉です。清水先生は、文部省科学教育局長(当時)として戦後の学術体制の刷新にあたられるとともに、本学学長として工業教育の発展、普及に多大な貢献をされました。一方で、中部経済圏の産業・文化発達のために名古屋市科学館の創設に尽力され、初代館長に就任されています。また、戦後、多くの新制総合大学に一般教養重視の大学教育システムが導入されたなかにあって、本学は「産業界の要望する活きた問題をとらえて、これを解決するために学術の根を深くおろすゆきかた」をえらぶべきである、として、産業界、社会が求める実践的な高度工学人材の育成と社会に役立つ研究を主体とした大学を目指されました。この精神は深く根付き、産学官連携において極めて高い実績と評価を築いています。

ICTの急速な進化によって、今、産業や社会のあり方が大きく変わりつつあります。産業は、これまでとは全く異なる仕方で人々の生活や意識を変え、新たな文化を加速度的に産み出していくでしょう。産業界と一体となって「人」、「知」、「技術」を繋ぎ、学術・文化で新しい技術の価値を創造し、新たな産業の種を生み出す拠点。名古屋工業大学はそのような大学であり続けたいと思います。